

儒教には本来既存の秩序を維持するというイデオロギー的機能があり、それ故に清末以来の中国の知識人はその克服をめざした。こうした彼らの問題意識は当然のものであったが、その問題関心を共有すると同時にその深化を図ったのが毛沢東である。文化大革命期、毛沢東はただ支配者にとって都合が良いかどうかだけを問題としたのではなく、以下に述べる意味で人々の精神の有り様をそれ自体として問題とした。文化大革命における儒教批判の嵐は毛沢東が政治の中心にいた時に彼によって展開されたのであって、政治的支配者

が政治的支配者としての利益に反することを承知で展開されたものだからである。この意味で毛沢東の文化大革命は一般に簡単に否定的に評価されるほど薄っぺらな「政策上の間違い」というものではない。このことを今回その儒教精神の強固に残る韓国においても一度考えてみた。私は外国人学者が京都大学で論文博士を取るための学術振興会のプログラムで年に一度相手国で指導に当たることになっているが、その機会が去る3月上旬にあり、韓国釜山に12日間滞在した時に韓国型の儒教精神にしばらくゆっくり浸ることができたからである。

もちろん、この「儒教精神」というもの、何がそれであり、何がそれでないか。あるいは、国と国の間でその内容が大きく違っているのではないか、といった問題があり、一言で論じることには大変難しい。が、一方において体制維持の保守思想とだけ言うわけにいかない美しさを「儒教精神」が持っていることも確かであり、教師を敬い、来客をもてなす、その姿勢に接して「儒教精神」の賛美者にならないものはいない。

がしかし、それはそれとして、反面の問題点を知らないわけには行かないのであって、たとえば年長者優遇のシステムが持つ革新性の喪失、「出る杭を打つ」反実力主義、若者や女性の地位の低さなどがあり、特に最後のものは韓国・朝鮮人の家族を訪問するたびに感じることもある。中国では韓国に比べて明らかに女性の進出が進んでおり、最近では組織内での世代交代の早さが目立っている。こうした特徴を毛沢東による儒教精神の破壊と無関係に論じことはできない。

あるいはもっと言って、「仁徳がありさえすれば人々は自然にそれに従うようになる」とのオプティミズムは現実の不正に対する厳しさを欠き、これは孔子に由来するものであるとの理解も存在する。たとえば、孔子はあるとき主君を倒して自身が君主となった者を助けてその宰相となったが、それは孔子の本来の考えと違うのではないかと問うた子貢に対し、「自分が宰相になれば三日で仁徳の行き渡る国ができ上がるからよいのだ」と答えた。が、清濁併せ呑むこの思想は不正を不正として糾す姿勢の欠如、あるいは単なる自己正当化ではないかという批判を呼ぶ。

たとえば、中国においてもこうした伝統を持たず、かつイスラム教徒であるウイグル族の人々に会うと、彼らはこうした精神のあり方に非常な違和感を持っているということを知ることができる。イスラム教にはイスラム教なりの問題点がないわけではないが、それでも常に「神のために自分は何をなすべきか」を考えている人々にとって、これでは不正と戦っているとは認識されない。ついでに言うと、彼らは「発財(財富)」のために寺院に行く中国人の行動を理解することができないだけでなく、時に心の底では軽蔑をさえしている。彼らにとって宗教とは自身をコントロールする規律であるのであるが、「東アジア的」な寺院は人々の我儘のためにあるように見える。新疆ウイグル自治区での民族間の溝が埋まらないのにはこうした事情もあるというのが私の正直な感想である。中国の寺院に行くと人々が一生懸命に「発財」を祈る一方で、その寺院の一步外ではゴミを捨てまくっているのをよく見かけるが、これなども自身の行為を律するものとして宗教がみなされていないことの象徴ではなかろうか。読者の皆さんはそんな体験をお持ちではないだろうか。

がしかし、実はこうであればあるほど、こうした人々の心性を正そうとした人物としての毛沢東の評価が重要になってくる。儒教精神は政治的支配者にとって心地よいものであるはずでありつつも、その支配者としての毛沢東があえて拒否をしたのには儒教を復活させた鄧小平との鋭い対照性が存在する。毛沢東は紅軍の組織においてこうした精神の改造を最も重視したが、その「重視」以上にそれを実際に成し遂げることができ、かつ農民を味方にする上で非常に大きかったことを肌で感じている。ので、この体験は「人間は改造されうるのだ」といった信念を支え、それが革命の対象を政治や経済のみならず「文化」にまで拡張しうるのであるとの哲学を形成した。この意味で「文化大革命」という哲学は

革命思想のひとつの到達点であって、我々凡人が日常感覚のレベルであらうと論じることができるようなレベルのものではない。これはこれで毛沢東評価において前提的に知らねばならない事柄である。

このことが重要なのはこの毛沢東時代を「中国論」としての例外と捉える考え方との接点を持っているということがある。これは、一部の中国史研究者の中国論でもあるが、毛沢東の試みが失敗に終わった以上、以上に見たような中国の心性は「儒教」という特定の宗教に依存したものではなく、より深く「中国」というものに根付いたものであることになる可能性が出てくるからである。実は、この意味では、こうした「保身主義」とでも言うべき心性(毛沢東は「反対自由主義」という論文でこう命名している)は「儒教」によって作られたものではない。その立場とするどく対立するはずの老荘思想にも「保身主義」に通じるものがある。老荘の人々は「不正」な主君に仕えることをよしとせず隠者として隠遁生活を送る。これだけを見れば極めて清潔で純粋な生き方に見えるが、不正に死を賭して挑むイスラム信徒たちには結局自分の身を守っているだけではないかと映る。これは実はキリスト教やユダヤ教といった宗教からも言えることで、要するに「原理主義」を有する宗教とそうでない宗教との差ということになる。そして、この意味では毛沢東の「マルクス・レーニン主義」もまた実は西洋起源の「原理主義」であって、この導入を彼は図り、そして失敗したのだということになるのである。こうしてかの毛沢東は「中国」と戦い「中国」に敗れた。中国は彼によってもその本質を転換されず、よって中国のままであり続けることとなったのである。

ただし、実は、こうしてこの中国的な心性を永遠不滅のものであると宣言してしまうのも時期尚早である。というのは、私の考えるところ、こう宣言されるためには、たとえば儒教の影響が相当に強いにも関わらず、この「保身主義」が中国ほどには目立たない韓国が十分に説明されねばならない。この回答としては、農耕社会における共同体のあり方、必要性の度合いや資本主義の成熟の度合いなどといった唯物論的視角からのものがありうるが、まだその点では未解明と言わなければならないだろう。

私は中国の高成長は今後も後 20 年程度は続くと予測しているが、そのときには日本やアメリカの GDP を凌駕し、当然世界の政治的リーダーとならなければならない。が、そうした中国の覇権を人々が恐れる理由のひとつには彼らの心性への不信があるのではないかというのが私の感覚的な意見である。イラク戦争でもフランスのようにアメリカに抗しなかった中国は世界の人々にとって大義より自国の利益を優先する国であるように映る。そして、これは小国である限り何の問題もない。が、世界を左右する大国が自国の利益をしか考えないとしたらどうなるのであろうか。これは「共産主義」への恐怖ではなく、自国本位主義への恐怖であるという意味で私はここで議論した中国人の心性問題の一部と考えている。そして、もしそうであるのなら、こうした「中国問題」と真に戦ったのが毛沢東であったということになる。毛沢東はこうして現在でもなお最高度に重要な研究対象として残されているのである。